

学習状況による学習意欲の変化と自尊心および自己評価の高低の関連

立石 琴子* 泉 明 宏** 藤井 靖***

学習のモチベーションを高めることは、学習を進める上で重要である。また、学習意欲の低下などの教育上の問題を改善するためには、自尊心を高める必要があると考えられている。本研究では、学習意欲の変動と、学習意欲のレベルが学習の動機に影響を与えるという仮説のもと、様々な状況を設定することにより、学習者の学習意欲の変動と自尊心との関係を調べた。また、各状況下での学習意欲の変動と他の能力に対する自尊心との関係を検証した。その結果、それぞれの状況下での学習意欲の変動と自尊心との関係は、いかなる状況においても見出されなかったことが明らかになった。したがって、学習意欲を向上または低下させる状況に対する自尊心の影響は支持されなかった。

キーワード：学習意欲, 自尊心

1. 問題と目的

未だ現代においても学力社会が根強く残っており、学業成績が良いことは就職活動などにおいても重要な要因と言える。しかし近年においては大学生の学習意欲の低下や目的意識の希薄化が指摘されている（中央教育審議会, 2008）。東京大学大学経営・政策センター（2007）の調査によると、大学1, 2年生の合計自律的学習時間（大学の授業の課題やテスト勉強以外の学習を行う時間）は、「週に0時間」が10.9%、「週に1～5時間」が57.5%であり自律学習時間が一日1時間以下である大学生が6割以上という結果であった。また学習意欲についても、国立教育政策研究所高等教育研究部（2016）の調査によると、「なるべく良い成績をとるようにしている」と回答した学生の比率は79%（「よくあてはまる」、「ある程度あてはまる」の合計）に達する一方で、「必要な予習や復習をして授業にのぞんでいる」学生は47%にとどまり、「必要な予習や復習をして授業にのぞんでいる」に対して「よくあてはまる」とした学生においても、週に11時間以上授業の予習や復習などを行っている者は3割程度にとどまるという結果であった。以上の結果から近年の大学生の学習態度は大学の単位を取得するための学習は行うものの、自発的に学習に取り組む学生は少ないと考えられる。

このような学生の学習意欲の低下やその他の教育現

場での問題の解決に向けて自己についての肯定的評価、すなわち自尊心を高めることが重要であると考えられてきた。例えば、1980年代のアメリカでは、学業不振や望まない妊娠、薬物乱用、犯罪などの問題を抑制するために、カリフォルニア特別調査委員会（California Task Force）が立ち上げられ、自尊心を高める研究および活動がおこなわれてきた（大谷, 2014）。

日本においても、文部科学省（2005）が、学業低下、いじめ、不登校などの教育問題に対処する為にこれからの学校教育で重視したい課題の中に、児童・生徒の自尊心を高めることをあげている。このような取り組みは、自尊感情の高さが、社会適応や様々なことにおけるパフォーマンス能力を高めることに繋がり、自尊心を高めると社会的望ましい結果が期待できるという信念から考えられているといえる。

大谷（2014）によれば、自尊心が高い人もしくは、自分にある程度の自信がある状態の人は、安心感や喜びなどポジティブな感情が喚起されやすいが、自尊心が低い人は、精神的に問題を抱えている人が多いことが明らかにされており（Dinner & Dinner, 2009）、自尊心が高いほど対人関係形成能力が高いことも指摘されている（Buhrmester, Furman, Wittenberg & Reis, 1988）。逆に自尊心が低い者ほど、非行や反社会的な行動を取る傾向にある（Donnellan, Trzesniewski, Robin, Moffitt & Caspi, 2005）、摂食障害になりやすい（Shaw, Stice, & Springer, 2004）ことなどが示されており、自尊心の高さが人間の精神衛生においてよりよい影響となることは明らか

* 明星大学大学院人文学研究科

** 明星大学心理学部心理学科

であるといえるだろう。

しかし、学習と自尊心の関連については、自尊心の高さが良い影響をもたらすという結果と、反対に悪影響をもたらすという結果に分かれているといえる。大谷 (2014) によると、自尊心が高い者は学業成績が良いことが報告されている (Hansford & Hattie, 1982; Brown, 1998)。また佐藤 (2013) においても自尊心が自律的な学習動機づけに影響するとしている。しかし大谷 (2014) によると行動する場合が自尊心の維持となる場合、課題達成を促進させるばかりでなく、恥や失敗などから自尊心を守ろうとするあまり課題達成を回避してしまうなどネガティブな側面を有するとしているとし、学業達成や内発的な興味を阻害する (Elliot & Church, 1997) 影響もあるとしている。

以上の先行研究をふまえると、自尊心の高さは直接学習意欲に関係するものではなく、学習を行う上で生じる様々な状況の受け取り方が自尊心の高さによって異なるからではないかだろうか。例えば、テストの点数が悪かったという状況について高自尊心の人よりも低自尊心の人の方がより危機感を感じ、学習に意欲的になる場合もあり、その場合、テストの点数が悪いという状況は自尊心が低い人にとっては学習意欲を向上させるといえる。

そこで本研究では、学習意欲を向上させる、もしくは減退させる状況は自尊心の高低によってことなるという仮説をたて、学習に関しての様々な状況を踏まえ、それについての学習意欲の変化と自尊心の高さを測定し、関連を検討した。

また自尊心は、社交能力や運動能力などの様々な個々の評価によって影響を受けて形成されると考えられている (山本・松井・山成, 1982)。このことから自分についての自己評価の高さは自尊心の高さということとなる。仮に自尊心の高さと学習意欲について何らかの関連がある場合は、学力以外の能力 (容姿の良さ、才能など) の自己評価の高さと学習意欲の高さにも関連がある可能性がある。よって本研究では学力以外の能力についての自己評価の高さについても測定し、学習意欲のとの関連についても検討した。

2. 方法

2-1 調査対象

調査対象者は、武蔵野大学に通う大学生 125 名 (男子 26 名, 女子 99 名) であった。

2-2 調査方法

質問紙による調査を行った。調査は講義中に行い、集団形式で実施した。最初に質問紙を配布し、回答の仕方に対する説明を行った。説明後は参加者のペースで回答を行なってもらった。

2-3 質問紙

質問紙は以下の3つの項目から構成されている。

①学習意欲の変化項目 (4項目)

自尊心に影響を及ぼすと考えられる状況を4つ想定し、それぞれの状況ごとの学習意欲の変化をたずねた。項目に回答する際は受験など長期的に勉強が必要であり、現在勉強中であることを想定し回答してもらった。4つの状況は模擬試験の結果が自分の予想よりも悪い場合、模擬試験の結果が自分の予想よりも良い場合、模擬試験の結果について他者から否定的な評価をされた場合、模擬試験の結果について肯定的な評価をされた場合である。評定は4段階 (1. 全く勉強しなくなる 2. 少し勉強しなくなる 3. 変わらない 4. 少し勉強しなくなる 4. とても勉強しなくなる) で行った。

また状況をイメージしやすいように質問紙内では上記の状況について以下のようにたずね、その際に学習意欲が変化するかをたずねた。

(1) 模擬試験の結果が自分の予想よりも悪い場合

あなたは、試験に向けて努力を重ね、模擬試験を受けました。しかし、模擬試験の結果は自分の予想よりもはるかに低い結果でした。

(2) 模擬試験の結果が自分の予想よりも良い場合

あなたは、試験に向けて努力を重ね、模擬試験を受けました。すると、模擬試験の結果は自分の予想よりもはるかに良い点数でした。

(3) 模擬試験の結果について他者から否定的な評価をされた場合

あなたは、試験に向けて努力を重ね、模擬試験を受けました。その結果を友達に言ったところ、あなたを馬鹿にしたような態度を取りました。

(4) 模擬試験の結果について肯定的な評価をされた場合

あなたは、試験に向けて努力を重ね、模擬試験を受けました。その結果を友達に言ったところ、あなたを褒めてくれました。

②学力以外の能力における自己評価項目 (3項目)

自尊心の維持や構築に関連すると考えられる学力以外の能力を3つ想定し、その3つについての自己評価をたずねた。3つの能力とは容姿についての自信、友

達の多さなど人間関係の充実、勉強以外の才能（音楽、芸術、スポーツ）である。評定は5段階（1. 全くない 2. ややない 3. どちらとも言えない 4. ややある 5. かなりある）で行った。

③自尊感情尺度（10項目）

Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成，1982）を用いた。Rosenbergの尺度は国内外の多くの研究によって次元性、妥当性、信頼性が確認されており、広く用いられている。評定は4段階（1. いいえ 2. どちらかといえばいいえ 3. どちらかといえばはい 4. はい）で行った。

3. 結果

学習意欲の変化については、「全く勉強しなくなる」から「とても勉強しなくなる」までの4件法に、1～4点を与え、学習意欲が高いほど得点が高くなるように設定した。また4つ項目を加算し、学習意欲の変化についての全項目を足し合わせた得点も算出した。学力以外の能力における自己評価についても「全くない」から「かなりある」までの5件法に1～5点を与え、自己評価が高いほど得点が高くなるように設定した。また学習意欲の変化についての項目と同様に3つの項目を加算し、学力以外の能力における自己評価についての全項目を足し合わせた得点も算出した。自尊感情尺度については、「いいえ」から「はい」までの4件法に、1～4点を与えて単純加算した。ただし、逆転項目については反転後の得点を加算した。

学習意欲の変化の項目についての結果は模擬試験の結果が自分の予想よりも悪い場合の平均値は3.62で、標準偏差は1.07であった。模擬試験の結果が自分の予想よりも良い場合の平均値は2.75で、標準偏差は1.37であった。模擬試験の結果について他者から否定的な評価をされた場合の平均は3.62で、標準偏差は1.08であった。模擬試験の結果について他者から肯定

的な評価をされた場合の平均値は3.82で、標準偏差は0.76であった。学習意欲の変化についての全項目を足し合わせた得点の平均値は13.82で、標準偏差は2.34であった。学力以外の能力における自己評価についての項目の結果は、容姿についての自信についての平均値は2.02で、標準偏差は0.98であった。友達の多さなど人間関係の充実についての平均値は3.22で、標準偏差は1.14であった。勉強以外の才能（音楽、芸術、スポーツ）についての平均値は2.79で、標準偏差は1.26であった。学力以外の能力における自己評価についての全項目を足し合わせた得点の平均値は、8.04で、標準偏差は2.40であった。自尊感情尺度については、平均値は23.65であり、標準偏差は5.86であった。

また学習意欲の変化項目について、各状況の学習意欲の変化には被験者ごとに差がみられ、同じ状況でも学習意欲が向上するのか低下するかは個人差があった。

次に自尊心尺度得点と学習意欲の変化についての項目得点間の関連を検討する為に相関係数を算出した。以降相関係数を算出する際、割り切れない場合は少数点第3位を四捨五入し、少数点第2位までを記述するものとする。その結果を示したのがTable 1である。

Table 1から、4つの項目の内、自尊感情と有意な相関係数がみられたのは模擬試験の結果が自分の予想よりも良い場合についてのみであり、その場合においても明らかな相関関係は認められなかった（ $r=0.18$ ）。

次に、自尊心尺度と学力以外の能力についての項目得点間の関連を検討する為に相関係数を算出した。その結果を示したのがTable 2である。

Table 2より、すべての項目得点において、有意な正の相関係数がみられた。自尊心尺度得点と各項目得点との関連については、友達の多さなど人間関係の充実についての項目は弱い相関を示した（ $r=0.32$ ）。容姿についての自信（ $r=0.55$ ）、勉強以外の才能（ $r=0.46$ ）、学力以外の能力についての全項目（ $r=0.62$ ）については

Table 1 自尊感情尺度と学習意欲の変化の相関係数

	自尊心	
学習意欲の変化	結果が自分の予想よりも悪い	-0.07
	結果が自分の予想よりも良い	.18*
	結果について他者から否定的評価	0.15
	結果について他者から肯定的評価	0
	学習意欲の変化全体	0.14

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 2 自尊感情尺度と学力以外の能力における自己評価項目得点間の相関係数

	自尊心
学力以外の能力における自己評価 容姿についての自信	0.55***
友達の多さなど人間関係の充実	0.32***
勉強以外の才能(音楽・芸術・スポーツ)	0.46***
学力以外の能力全体	0.62***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3 学習意欲の変化項目得点と学力以外の能力についての自己評価項目得点間の相関係数

	容姿についての自信	友達の多さなど人間関係の充実	勉強以外の才能(音楽・芸術・スポーツ)	学力以外の能力全体
結果が自分の予想よりも悪い	0.10	0.13	0.12	0.16
結果が自分の予想よりも良い	0.00	0.08	0.17	0.12
結果について他者から否定的評価	0.09	0.04	-0.07	0.02
結果について他者から肯定的評価	0.10	0.00	-0.03	0.03
学習意欲の変化全体	0.05	0.14	0.12	0.15

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

比較的強い相関がみられた。

次に学習意欲の変化の項目得点と、学力以外の能力についての自己評価についての項目間の関連を検討する為に相関係数を算出した。その結果を示したのがTable 3である。

Table 3の結果から、全ての項目間において有意な相関係数はみられなかった。また、全ての項目間において明らかな相関関係はみられなかった。

4. 考察

本研究の目的は学習意欲を向上させる、もしくは低下させる状況は自尊心の高低によってことなるという仮説のもと、学習に関しての様々な状況を設定し、それについての学習意欲の変化と自尊心の高さとの関連と、学力以外の能力についての自己評価の高さと設定した各状況における学習意欲の変化との関連を検討することであった。

Table 1について、自尊心尺度と学習意欲の変化項目得点間には、4項目すべてにおいて明らかな相関関係は見られなかった。この結果から設定した各状況の学習意欲の変化と自尊心の高さとの関連はどの状況においてもみられず、学習意欲を向上させる、もしくは減退させる状況は自尊心の高低によってことなるという仮説は支持されない結果となった。しかし各状況での学習意欲の変化には調査対象者間で差が見られ、学習意欲を向上させるもしくは低下させる状況は個人に

よってことなるということは明らかであると考えられる。

よってこの結果から今回の調査で設定した各状況の学習意欲の変化をもたらした要因は自尊心に関連するものではないが、学習意欲の向上の要因は個人個人で異なるとは言える。

このことから、学習意欲の向上、低下に關与する要因とは一つの要因に限るものではなく、個人の経験や性格、その時の気分など様々な要因が組み合わさっているものなのではないと考えられる。

そこで今後の課題として、個人の様々な特徴を測定し、その結果と学習状況における学習意欲の変化との関連を検討する必要がある。また今回の調査では学習意欲の変化についての項目を回答してもらう際は長期的に勉強が必要であり、現在勉強中であることを想定してもらったが、回答者の中には大学2年生や就職活動の終了した4年生も含まれており、就職活動や大学院受験などに向けてなど現在実際に何か受験勉強をしている人は少なく、今回の調査での回答と実際その状況を経験している状態での回答では、ずれがある場合も考えられる。次回同様の調査を行う場合は、実際に受験勉強を行っている人に対して調査を行う方が良いと考えられる。

Table 2について、自尊心尺度と学力以外の能力における自己評価についての項目得点間には、友達の多さなど人間関係の充実についての項目は弱い相関を示

した ($r=0.32$)。容姿についての自信 ($r=0.55$)、勉強以外の才能 ($r=0.46$)、学力以外の能力についての全項目 ($r=0.62$) については比較的強い相関がみられた。学力以外の能力についての全項目と自尊感情尺度との正の相関が最も高いことから、様々な能力をもつほど、自尊心が高いと言え、この結果は、自尊心は、社交能力や運動能力などの様々な個々の評価によって影響を受けて形成されると考えられている (山本・松井・山城, 1982) という先行研究を支持する結果となった。

Table 3 について、学習意欲の変化項目得点と学力以外の能力における自己評価についての項目得点間には、どの項目間においても相関関係はみられなかった。

よって、設定した各状況の学習意欲の変化と学力以外の能力の自己評価の高さとは関連がないと考えられ、つまり容姿が良いことや、音楽やスポーツについての才能があることは、学習意欲の高さや低さには関係がないと考えられる。

しかしこの結果は今回の調査で設定した4つの状況についての学習意欲の変化を調べたもので、学習意欲を直接的に調べてはいなかった。今後は相対的な個人の学習意欲についての尺度を用いて、学習意欲を測定し、その値と学力以外の能力の自己評価との関連について再度検討する必要があるといえる。

今回の調査では、自尊心と自己評価の高さによって学習意欲が向上するまたは低下する状況が異なるということも明らかにすることができなかった。昨今問題となっている若者の無気力、学力の低下を打開するためには、学習意欲を向上させる要因を検討していくことはもちろん重要であるが、それだけでは解決はできないだろう。2020年から大学入試センター試験が廃止され、大学入学共通テストに移行する。新しいテストでは、暗記だけではなく、日常と関わる問題を解決する方法などが問われ、学んだことをいかに社会の中でいかす能力が測られる。よってこのことから今後の教育現場においては、これまでの先生から習ったことを身につけていくことやテストで良い点を取ることが重視されてきた受動的な学習よりも、学習した内容か

ら自ら発展させていく自律的な学習が必要であると言える。このような自律的な学習を行うには内発的動機づけを高めていくことが重要であると考えられる。つまり今後は学習意欲が向上する要因を考えるだけではなく、自らそれを望んでしているという内発的な動機を高める研究をさらに行なっていく必要がある。

今回の研究では学習意欲を向上させる、もしくは低下させる状況は個人の自尊心の高さによって異なるという仮説のもと調査を行った。研究の結果では仮説を支持する結果は得られなかったが、同じ状況でも学習意欲の高さは調査対象者ごとに異なり、学習意欲を向上させる、低下させる要因は個人によって異なることは明らかである。この結果から内発的動機づけを高める要因も個人によって異なるのではないかと考えられる。

今後は学習意欲を向上させる要因は個人によって異なるという仮説のもと、それぞれのパターンを分類し、そこから一人ひとりがより自律的な学習を行える方法を検討していくことがこの研究の最終目標である

5. 引用文献

- 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申)
- 国立教育政策研究所高等教育研究部 (2016). 大学生の学習実態に関する調査研究について
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領
- 大谷和太 (2014). 学業に影響を及ぼす過程：自己価値随伴性に着目した検討 大阪大学人間科学研究科博士学位論文
- 佐藤美佳 (2013). 看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求との関連 日本看護研究学会雑誌, 36 (2), 35-46.
- 東京大学大学経営・政策研究センター (2007) 全国大学生調査
- 山本真理子, 松井 豊, 山城由紀 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 (1), 64-68

Relations between learner's motivation for learning depend on learning situation and self-esteem as well as effect of self-evaluation

KOTONE TATEISHI(GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY)

AKIHIRO IZUMI(FACULTY OF HUMAN SCIENCES, MUSASHINO UNIVERSITY)

YASUSHI FUJII(SCHOOL OF PSYCHOLOGY, MEISEI UNIVERSITY)

MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2020, 38, 9—14

Enhance the motivation for learning is important to advance learning. Moreover, it is considered important to improve self-esteem to improve educational problems such as decreasing of motivation for learning. However, it is not clear how self-esteem relates to motivation for learning. This study investigated relations between fluctuation of learner's motivation for learning and level of self-esteem, by setting various situations under a hypothesis that level of self-esteem has influence over motivation for learning. Also, relation between fluctuation of motivation for learning under each situation and level of self-esteem for other ability was verified. The results revealed that relationship between fluctuation of motivation for learning under each situation and level of self-esteem was not found in any situation. Accordingly, the hypothesis that self-esteem level effects on a situation that improves or declines one's motivation for learning was not supported. Neither, fluctuation of learning motivation in each setting situation and level of self-esteem for other than scholastic ability had no relations.

Key Words : learning motivation, self-esteem